

口コミ・ネットで 地域で——「まち食」

みんなで料理一緒に食べる

民家に2歳から76歳の40人

世代超えつながる場

6月の週末、東京都世田谷区の古い住宅街。夕方になると、一軒の民家から野菜を煮込む甘い香りが漂い始めた。

会所では、15人ほどの男女がまな板やコンロに向かい、にぎやかな声が通りに漏れる。見知らぬ者同士が一緒に夕飯をつくるイベント「共奏キッチン」だ。



みんなでつくった料理を囲んで乾杯=東京都世田谷区

「すみません、初めて来たんですけど……」。会所に入ってきた女性に、一人がさかさず「ニンジンの葉がすかさず」と言つぱを洗つてくれますか? かき揚げにするから」と声をかける。「え、葉っぱつて食べられるんですか?」。自然に会話が生まれた。3時間後、2歳から76歳までの40人が、できあがつたサラダやパスタなど15種類の料理を囲んで乾杯。立食パーティーを楽しんだ。

共奏キッチンは2011年

□「ミルクSNSを通じて集まつた人たちが、一緒にご飯を作つて食べるイベントが各地で開かれている。世代間交流や団地の活性化など目的は様々だが、誰もが楽しめるご飯作りが人々を引きつけている。

学生と「おかん」がお袋の味

月1ラノチ 悩み相談

まちづくりの一計
まちづくりに詳しい首都大学東京・饗庭伸准教授の話
楽しいことには人が集まる。誰もが興味を抱きやすい料理が、まちづくりの仕掛けとして使われている点がうまい。

「高齢者を助けましょう」と呼びかけても、関心のある人や困っている当事者しか来ないケースが多い。一方、楽しいことには自然に人が集まり、親しくなつてその食べたい」と口にしたのがきっかけで、居合わせた母親世代が一念発起して始めた。

まちづくりに詳しい首都大学東京・饗庭伸准教授の話
おいしいことには人が集まる。誰もが興味を抱きやすい料理が、まちづくりの仕掛けとして使われている点がうまい。

「高齢者を助けましょう」と呼びかけても、関心のある人や困っている当事者しか来ないケースが多い。一方、楽しいことには自然に人が集まり、親しくなつてその食べたい」と口にしたのがきっかけで、居合わせた母親世代が一念発起して始めた。

大学生の声から生まれたまち食もある。東京都国立市公民館で月1回開かれる「おさんめし」は、12年冬にスタートした。地域のまちづくり勉強会に参加した一人暮らしの一橋大生が「お母さんの手作り料理が食べたい」と口にしたのがきっかけで、居合わせた母親世代が一念発起して始めた。

地域の母親と学生たちが公館に集まり、一緒にラーメンを作つて食べている。参加費500円。一橋大4年の松本知仁さん(23)は、昨夏からほぼ毎回参加している。「一人暮らしだと余らせてしまうので、なかなか野菜を買えないけれど、この日は栄養たっぷりのご飯が食べられる」と満足げだ。

離れてても、たまたま顔を出してくれる卒業生もいる。この地域を忘れないでくれるのはありがたい」と話す。65歳以上が45%以上の板橋区の高島平団地では、希望する住民が当番制でご飯を作る「おうちごはん」が昨春から続く。主催するのは、団地内で「コミユニティーカフェを開くNPO法人ドリームタウン」。月に2日前後開かれる「ごはん」の参加者は、子育て世代から高齢者まで幅広い。

「たくちゃん」の愛称で親しまれ、週1回は手料理を披露する内田卓さん(77)は、団地に一人暮らし。今度はいつ作るの、と聞かれるといつづけた。母もこんな風に悩んでいたのかなど、同世代との交流だけでは気づけない発見もあった

代表のみやゆうこさん(43)は、「就職して国立市を

地域の母親と学生たちが公館に集まり、一緒にラーメンを作つて食べている。参加費500円。一橋大4年の松本知仁さん(23)は、昨夏からほぼ毎回参加している。「一人暮らしだと余らせてしまうので、なかなか野菜を買えないけれど、この日は栄養たっぷりのご飯が食べられる」と満足げだ。

息子の受験を控えた母親を披露する内田卓さん(77)は、団地に一人暮らし。今度はいつ作るの、と聞かれるといつづけた。母もこんな風に悩んでいたのかなど、同世代との交流だけでは気づけない発見もあった

代表のみやゆうこさん(43)は、「就職して国立市を

かれている。月1回、ビルの貸しスペースに地域の人たちが集まる「おたがいさま食堂」。近くに住む斎藤志野歩さん(35)が始めた。仕事の後、保育園に長男を迎えに行き、夕飯を作つて作つて食べたら、気持ちが楽になるかも」と思いついた。2人きりで食事をする毎日。その繰り返しに閉塞感を抱いていた。「家のことは家中で完結させるんだ」という常識にしばられず、地域の人とにぎやかにご飯を作つて食べたら、気持ちが楽になるかも」と思いついた。

商店街の魚屋からブリを丸ごと1匹仕入れ、みんなで解体したこともある。「楽しい、おいしい場所に月1回、空き家を活用して交流スペースを借りて開くイベントには、フェイスブックや口コミを通じて30人前後が集う。世田谷区で農業を営む常連の吉岡誠市さん(62)は「職業、年齢に関係なく色々な世代と出会える。こういうつながりが、いつか自分を助けてくれると思うんだよ」。

参加者が一緒に料理して食べるイベントは、昨春から続いている。「まち食を通じて、は人が集まる」と実感し、食を通じてつながりをつくる活動を「まち食」と名付けた。「まち食を通じて、食べるやかに人をつなぎたい」と話す。

地域の母親と学生たちが公館に集まり、一緒にラーメンを作つて食べている。参加費500円。一橋大4年の松本知仁さん(23)は、昨夏からほぼ毎回参加している。「一人暮らしだと余らせてしまうので、なかなか野菜を買えないけれど、この日は栄養たっぷりのご飯が食べられる」と満足げだ。

息子の受験を控えた母親を披露する内田卓さん(77)は、団地に一人暮らし。今度はいつ作るの、と聞かれるといつづけた。母もこんな風に悩んでいたのかなど、同世代との交流だけでは気づけない発見もあった

代表のみやゆうこさん(43)は、「就職して国立市を